

JAPAN GOLF ASSOCIATION

JGA Golf Journal



リオ五輪コース全景



公益財団法人日本ゴルフ協会



スポーツ振興くじ助成事業

メダルのカギはショートゲームの イマジネーションとテクニック

山中博史 JGA 専務理事インタビュー

8月5日に開幕するオリンピック、リオデジャネイロ大会でゴルフが112年ぶりに正式競技として復活する。日程は男子が11日から、女子は17日から、それぞれ個人戦を4日間72ホールストロークプレーで競う。昨年12月に舞台となるレセルバ・マラベンディゴルフクラブを視察したオリンピックゴルフ競技対策本部統括コーディネーター山中博史JGA専務理事がコースの特色や攻略ポイント、さらには2020年東京大会に向けた思いを語った。



現地視察し、開催コースの特徴・攻略ポイントや2020年東京大会の課題を語る山中博史専務理事。

— まず昨年の12月に現地を訪れた経緯をお聞かせください。

山中 はい。JOC（日本オリンピック委員会）と各NF（ナショナルフェデレーション=競技統括団体）の合同視察会の一員としてリオデジャネイロ（以下リオ）に行きました。いくつかのグループに分かれてそれぞれの競技会場の視察ツアーなどを行ったあと、各NFが独自調査を行う日が設けられていました。全体視察ツアーではクラブハウスの周囲くらいしか見ることができませんでしたので、独自調査日にはコネクションを

駆使してコース内を視察する手はずを整え、グリーンキーパーの案内のもと、各ホールの案内をじっくりとチェックすることができました。非常に有意義な独自調査ができたと思います。

— 実際にオリンピック開催コースを見た印象は？

山中 事前にフラットな地形につくられたコースだと聞いていました。ただ、実際にコースを見て驚いたのは全体的にはフラットでありながら、ティーインググラウンドにもフェアウェイにもグリーンにも非常に大きなアンジュレーションがあるということでした。

— ティーインググラウンドにもアンジュレーションがあるのですか。

山中 はい。日本やアメリカは一般的にティーインググラウンドがある場所はボックス状になっており、排水の関係で多少の傾斜はあっても基本的には平らです。しかし、レセルバ・マラベンディGCには特にボックス状のようなものではなく、アンジュレーションがある場所を刈り込んでそこにティーマーカーを設置する形です。つまり、ホールによってはつま先上がりや、つま先下がりというようなさまざまなライからティーショットを打たなければならないということです。昨年、全米オープンが開催されたチェンバーズベイでもティーインググラウンドとはいえないような場所にティーマーカーを置いていましたが、それと同じような形ですね。

— フェアウェイはいかがですか。

山中 走行中のカートが大きく揺れるくらいのアンジュレーションです。平らなライから打てる可能性は少ないでしょうね。幅は平均40～50ヤードと広く、ラフは全くありません。その代わりにフェアウェイを外すとウエストエリアという荒（砂）地が待ち構えています。ブッシュがあちこちにあるので、そこにつかまればロストボールやアンプレヤブルの可能性もあるでしょう。グリーンが多くは砲台のような形で周囲が外側に落ち込んでいるのが特徴です。グリーン周りにもラフがなく、芝を短く刈り込んでいますから、少しでも外れた場合は下まで転がり落ちてしまいます。

— 芝はどのような種類を使用していますか。

山中 グリーン以外はゾイシアという種類。日本でいうコーライ芝です。グリーンはシーショアパスタラムというバッシュダ系の芝です。これはハワイなど海に近い場所でよく使用されている芝。塩を含んだ風や土壌に強い種類です。

— つまりレセルバ・マラベンディGCは海に近いコースということでしょうか。

山中 ええ、大西洋に面したコースです。コース内からは直接見えませんが、南側はすぐに大西洋です。グリーンキーパーによると、オリンピックが開催される8月は旗竿がしなるくらいの強い風が大西洋から吹きつけてくるそうです。



— お話をうかがっているとスコットランドなどのリンクスに近いイメージが思い浮かびます。

山中 そうですね。ただ、芝は青々としていますし、池が何か所かありますから、少し趣は異なりますね。

— 新設のコースだと聞きましたが、設計者はどなたですか。

山中 ギル・ハンスという新進気鋭の米国人設計家です。日本でも東京ゴルフ倶楽部のリニューアルを手掛けています。コース自体は極端に難易度が高いわけではなく、一般のアマチュアゴルファーも楽しめるものだと思います。距離は男子で7200ヤード前後になると予想されますから、それほど長いわけではありません。風のない好天が続けば優勝スコアは20アンダー前後になるのではないのでしょうか。ただ、先ほど申し上げたように風が吹きつものですから、強風を想定してつくったコースだと感じました。木がほとんどなく、吹きさらしですから風の影響をまともに受けるはず。そうなるとう簡単には攻略できないでしょう。

— すると、風に強いショットを打てるプレーヤーが有利？

山中 そうですね、リンクスの風に慣れている英国やアイルランドのプレーヤーが強いかもかもしれません。ただ私がスコアメイクのポイントだと考えるのはショートゲームです。強風の中、うねりのあるフェアウェイから打つことを強いられるわけですから、グリーンを外す回数が増えると考えられます。しかもグリーンは周囲が落ちこんでいる形ですから、グリーンに落下しても転がり落ちる危険性が高いわけですね。グリーンを外すと刈り込まれた薄い芝の上から大きくうねったグリーンに向かって打ち上げのアプローチとなります。これは簡単ではありません。最初から転がっていくのか、ワンクッションを入れる攻め方がいいのか、ショートゲームのイマジネーションとテクニックを試されるコースだと思います。つまり、パワーよりもショートゲームのうまいステディーなプレーヤーがこの舞台には合うのではないかと考えています。

— フェアウェイがコーライ系の芝ということは日本人選手にとってプラス材料になるのではないのでしょうか。

山中 近年、コーライ芝は耐久性があり高温多湿に強く、管理しやすいなどの理由で世界的に評価が高まっています。アメリカでもフェアウェイにコーライ系の芝を採用するコースが増えているほどです。それでも慣れという点では日本人選手のほうが上ではないのでしょうか。コーライ芝はボールが浮き気味になりますから一見打ちやすそうなのですが、海外の選手が日本に来た時に「コーライ芝は引っ掛かりそうに感じて、調整するのが難しい」という言葉をよく口にしています。

— ブラジルは暑いというイメージがありますが、オリンピック期間中の気候はいかがですか。

山中 南半球ですから8月は冬にあたります。リオの8月の平均気温は25度程度ですから、気温的には快適だと思いますよ。むしろ朝の早い時間帯は気温が下がってセーターが必要なほどだそうです。

— 選手村からのアクセスはいかがでしょうか。

山中 渋滞がなければ車で10～15分です。ただ選手村は1部屋を4人前後で利用する形になりますので、ゴルフの場合、選手やキャディーは別にホテルを手配することになるでしょう。選手村で寝泊まりするのは私のようにチームマネージャーとしてJGAから同行するスタッフですね。というのも大会のすべての情報は選手村に集まりますので、たとえば翌日のスタート時間が急に変更になったなどの情報を選手村に駐在するスタッフがいち早くキャッチして選手らに伝えることが必要になるのです。

— オリンピックの出場枠は男女それぞれ60人。顔ぶれもメジャーとはかなり異なることが予想されます。

山中 男子のメジャーを例に挙げれば全英オープンや全米オープン、全米プロは出場枠が156人で世界ランキング上位者はほぼすべてプレーします。これに対してオリンピックは出場枠が60人と少ない上に、1カ国で最大4人～2人という制限がありますから、

世界ランキング上位であっても出場できない選手がたくさんいます。韓国の女子などは世界ランキング15位以内でも出場できるかどうか分からないほどです。一方で出場国は男女とも30数カ国になる予定ですから、選手層の薄い国なら世界ランキング300位台や400位台でも出場できる。メジャーとはかなり違うフィールドになることは間違いありません。

— メジャーよりもトッププレーヤーが少ないからメダルのチャンスが広がると考えることができるのではないのでしょうか。

山中 そういうとらえ方もできると思います。ただ、どこの国の選手も同じですが、オリンピックは初体験ですから感じるプレッシャーや周囲の雰囲気は未知数。その中でどれだけのことができるかは予想しづらいと思います。

— メジャーと大幅に異なるフィールドにする意味はどこにあるのでしょうか。

山中 IOC（国際オリンピック委員会）にはオリンピックを世界のトップアスリートが競う場にすると同時にひとつでも多くの国に参加してもらいたいという思惑があります。一方であまり競技時間が長くなることは望まれていません。多くの国から参加してもらいたいって出場枠をメジャーと同じ数にすれば朝から夕方遅くまでプレーすることになります。それはIOCにとって歓迎すべきものではないのです。これらの要素を加味して練り上げたのが今回の出場資格なのです。

— 日本は2020年に東京大会を控えていますから、リオ大会で好成績を収めて弾みをつけたいところですね。

山中 以前、IOCのスタッフが来日し、各NFを集めてセミナーを開催したことがありました。あるNFの方が「開催国のNFとしてしなければいけない一番大切なものは何ですか」と質問したところ、IOC側から間髪入れずに「自分の国から1人でも多くのメダリストを出すことです。それがそのオリンピックを成功させるカギになる」という答えが返ってきたのです。質問した方は運営や広報の方法について質問したつもりだったのですが、IOCは「それは我々と組織委員会の仕事。あなた方の仕事はメダリストを出すことです」と言い切っていました。それだけ、開催国の責任は大きいのだと感じました。

〔第31回オリンピック2016年リオ大会〕

大会開催期間	2016年8月5日(金)開幕式～21日(日)閉幕式 《選手村開村》7月24日～ 《男子ゴルフ競技》8月11日～14日(4日間) 《女子ゴルフ競技》8月17日～20日(4日間)
--------	--

〔第32回オリンピック2020年東京大会〕予定

大会開催時期	2020年7月24日(金)～8月9日(日) 《男子ゴルフ競技》7月30日～8月2日(4日間) 《女子ゴルフ競技》8月5日～8月8日(4日間)
--------	--

— 責任を果たすためには強化策を明確にすることも必要ですね。

山中 その通りです。ただ、ゴルフの場合は非常に難しいところがあるのも事実です。

— いろんな団体が存在する構造が一貫した強化を難しくしている。

山中 我々JGAはゴルフのNFであり、次世代のゴルファーを発掘して育成、強化していくという役割があります。ただ、それはそのゴルファーがプロになるまでの話です。今回、オリンピックの対策本部をJGAとプロの団体である日本プロゴルフ協会、日本ゴルフツアー機構、日本女子プロゴルフ協会の4団体で組織しました。このような形を継続しながら将来の金メダリストを育てていくことが絶対に必要です。理想を言えば、そこに高校ゴルフ連盟や大学ゴルフ連盟などさまざまな団体にも加わっていただき、ゴルフ界全体、つまり「オールジャパン」で取り組むことが不可欠です。そうしなければお金も人も分散してしまい、きちんとした強化プログラムがつかれないと思います。

— オリンピック競技に採用されたことで今までにない流れがゴルフ界にできつつあることは確かだと思います。それくらい、オリンピックは魅力的であり、大きな力を持っている。

山中 オリンピック日本代表のヘッドコーチを務める丸山茂樹さんは「ゴルファーとして一番感動したことのひとつが学生時代にアジア大会で金メダルを獲得して君が代が流れる中、日の丸が掲げられた瞬間でした。あの感動は他に経験したことがないもの。ぜひ若い選手たちにもその感動を味わってもらいたい」と言っています。アジア大会とオリンピックでは規模が違うかもしれませんが、国を代表して戦うという意味では同じだと思います。願わくばリオでメダルを手にして丸山さんの言うような感動を味わってもらいたいと思います。そして2020年には東京で金メダル。それが日本のゴルフ界全体の希望でしょう。

— 本日はありがとうございました。

出場選手の選出方法と選手総出場枠

2016年7月11日時点の男女別ゴルフ世界ランキング(以下「ランキング」)で出場選手が選出され、出場選手枠は男女とも各60名まで。

- ①ランキング上位15位迄の選手は、1ヶ国に付き4名まで出場できる。
- ②16位以下は、1ヶ国に付き2名まで出場できる。
(例：15位以内に1名のみのは、16位以下の1名と合わせ2名となる)
- ③大会ホスト国であるブラジルは、最低でも1名の出場枠は保証される。
- ④各々5大陸(アフリカ、アメリカン、アジア、ヨーロッパ、オセアニア)から、最低でも1名の出場枠は保証される。



Image by : Nobuyuki Ogata

リオ大会オリンピックゴルフコース 砂地帯と低木に覆われたエリアがグリーン近くまで侵入。

ナショナルチーム改革。 ガース・ジョーンズヘッドコーチが 世界の風を運んできた

JGAナショナルチームが世界と伍して戦うために新たなスタートを切った。昨年10月、オーストラリアナショナルチームのコーチを務めるガース・ジョーンズ氏をJGAナショナルチームのヘッドコーチとして招へい。直後のノムラカップアジア太平洋アマチュアゴルフチーム選手権で見事26年ぶり9度目となる優勝を飾った。初めての試みとなる海外からのヘッドコーチ招へいは何をもち、ナショナルチームはどう変わろうとしているのか。ジョーンズ氏のインタビューを交えて報告する。



ガース・ジョーンズ氏

Mr. Gerath Jones

1971年英国生まれ。オーストラリアゴルフ協会(GA)ナショナルコーチ。ナショナルチーム(以下NT)サポートの経験を豊富とし、帯同した多くの派遣試合で好成績を収め続ける。その功績が評価されJGANT新体制にヘッドコーチとして招へいに至る。

これまでナショナルチームの強化を担っていたのは基本的にボランティア委員であり、スポーツ科学を基盤とした体系的なサポート体制が成熟していなかった。これに対して強豪国では経験豊富なヘッドコーチを配し、各分野の専門家をスタッフにそろえているのが一般的。世界基準のサポート体制を構築するには各国の強化スタッフとのコネクションを有するヘッドコーチの招へいと、国内の各分野の専門家とのコミュニケーションを密にして選手強化の知識および経験を体系化していくことが不可欠であるとの結論に達した。

注目したのがオーストラリアゴルフ協会(GA)の強化プログラムだった。GAでは成績が低迷したのを機に2010年に専門家中心の新たな強化体制を構築し、2014年の世界アマでは女子優勝、男子は6位と復活した実績があったからだ。

プロのライセンスを持つジョーンズ氏はGAの強化組織改革に当初からコーチとして加わり経験豊富。各国とのパイプもあり、新体制のヘッドコーチとして最適であるとの判断から招へいに至った。

ノムラカップでジョーンズ氏が選手たちに実践させたのは大会への事前準備と徹底したゲームプランの構築だった。大会前にUAEの気候情報を収集し熱中症への対策をレクチャーしたほか、練習ラウンドで「インポジション」と呼ばれる打つべき場所と打ってはいけない場所を明確にさせたほか、「ゼロライン」と呼ぶホールロケーションに対して上りのまっすぐなラインのバッティングが打てる地点などあらゆる情報をヤーデジブックに書き込ませて緻密なゲームプランを練り上げさせ、優勝につなげた。また、合宿中のラウンドでは分析プログラムにすべてのショットのデータを入力。長所や弱点を数値化して選手個々に理解させている。

さらには今年春先のオーストラリア合宿では3Dの動作解析とフィジカルの専門家を呼んで選手のスイングとフィジカルをチェック。1人1人に応じたトレーニングのプログラムを立てていった。

ジョーンズ氏は現在も拠点はオーストラリア。ナショナルチームのメンバーと直接会える時間はそう多くはないが、スポーツ専用のコミュニケーションアプリでやり取りしてアドバイスを送るなど、密にコミュニケーションをとっている。



Queen's Club事前合宿でジョーンズ氏の講義を受ける日本チーム。

ノムラカップでキャプテンとしてチームを率いた堀田勝市JGAナショナル強化委員会委員は「ガースが来て準備段階からすべてが変わったと感じました。やっと日本も(世界レベルの)土俵に上がったということだと思います」と話す。

かつて日本の男子は世界アマで上位の常連だった。1974、76、82年と3度の2位のあと、84年にはついに世界の頂点に立っている。女子も世界アマで5位以内を8度記録している。だが、ともに近年は低迷。日本開催だった2014年には女子は8位、男子は29位に終わった。再び世界と対等に戦うために選択した“ジョーンズ体制”。まだ始まったばかりだが、大いに期待できそうだ。

— 生まれ育ちはオーストラリアですか。

ジョーンズ 生まれたのは英国です。2歳で一度オーストラリアに来て、9歳で再び英国に戻りました。ゴルフを覚えたのは英国です。16歳でまたオーストラリアに帰りました。

— プロの資格を持っていますが、ツアーのライセンスですか、それともティーチングのライセンスですか。

ジョーンズ 両方です。1993年からプロになるための準備を始めて、1995年にプロになりました。1997、98年の2年間はツアープレーヤーとして活動しましたが、成功できませんでした。

— ティーチングの分野を専門にしたきっかけは何かありますか。

ジョーンズ もともと教えることが好きでした。それに、ツアーで成功しませんでしたから生活していくためにティーチングの道に入ったという理由もあります。



オーストラリア合宿風景。



SAクラシック出場の金澤(左)を指導するジョーンズ氏。金澤を優勝に導いた。



ノムラカップで26年ぶりの優勝を飾った日本チーム。



ノムラカップ練習ラウンド。ジョーンズ氏(左)、金谷(右)。

— GAで仕事を始めたのはいつごろですか。

ジョーンズ 2000年から2004年までにAIS(オーストラリア国立スポーツ研究所)というところで働いていました。AISはエリートのアスリートを育成する機関です。その後、ビクトリア州の女子コーチを経て、2008年にサウスオーストラリア州のコーチに赴任しました。2010年にGAが新しい強化プログラムをスタートさせ、それが今につながっているのです。

— 日本の国や選手にどのような印象を持っていましたか。私たちに日本の選手は海外選手に比べるとシャイに感じますが。

ジョーンズ 日本のみなさんはフレンドリーですし、すごく礼儀正しい。オーストラリアと正反対です(笑)。選手たちも敬意を示してくれるのでとてもいい印象です。私が接している選手たちしかわかりませんが、確かに私も日本には内気な選手が多いと感じます。でも、オーストラリアにもそういうタイプの選手はいますよ。ゴルフは個人競技ですから、自分の意見を主張して他の意見とすり合わせていくことが必要なチームスポーツも経験してほしいと思います。コミュニケーションをとりながら切磋琢磨していくチームメイトがいることで、自分の殻を破り、成長することが出来ますから。

— では、日本選手特有の長所はありますか。

ジョーンズ 物事に積極的に取り組む姿勢が印象的です。私が提供する情報をすぐに受け入れて実行してくれる選手が多いですね。その姿勢が、私の期待以上のスピードで選手を成長させていますし、さらに高いレベルのカリキュラムを彼らに提供できることに繋がっています。

— 具体的にはどのような情報を提供してコーチングしているのですか。

ジョーンズ 今やっているプロジェクトとしては正しい練習の方法をしっかりと教えることです。たとえば、海外の選手は練習の65%がショートゲームです。一方、日本の選手は、ドライバー等のロングショットの練習がその割合の多くを占めています。スコアメイクに必要なアプローチに練習の多くを割いて、かつ、質の高いものにする事の大切さを話しています。また、ただボールを打つだけでなく、自分の結果を数値として表せるような練習方法を教えています。

— それが日本が世界で活躍するために必要な部分になるわけですね。

ジョーンズ その通りです。練習と統計をリンクさせ、数値化していくことが大事です。数値を明確にすることが本当の自信につながっていくのです。

— 昨年のノムラカップで日本のナショナルチームのヘッドコーチとして実際に現場に行きましたが、そこで選手たちにどのようなことを伝え、どのようにモチベーションを上げていったのでしょうか。

ジョーンズ 選手たちがすでに「勝ちたい」というモチベーションを持っていましたから、気持ちの面では特に何かをやるうとは意識していませんでした。私が選手たちと取り組んだのは開催コースに対してほかのチームよりもしっかり準備をすることでした。どのような練習ラウンドをしてどのように戦っていくかということをお伝え、選手たちは猛暑の中、練習ラウンドでヤーデーブックにコースの情報をしっかりと書き込んでくれました。しっかりとした準備ができたことが試合の4日間、集中力を切らさず、

モチベーションを保てることにつながったのだと思います。

— 練習の質の向上と、試合に向けての準備が大切なのですね。では、具体的に練習ラウンドで注意させているポイントを教えてください。

ジョーンズ トーナメント開催コースでどう戦っていくかというゲームプランを作ることが一番大切なことです。もしうまくプレーできなかった場合には、ほかにどのような選択肢があるのかということも考えてもらいます。日本選手は海外の芝からのショートゲームへの対応に苦労しています。若い選手は、芝によって打ち方も変わることを知り、その対応力を上げるためにどう調整していくかも準備の大切な要素の一つです。

— しっかりと準備ができてゴルフはうまくいかないこともあります。そんな時に選手にはどのようなことを伝えますか。

ジョーンズ 目先のことも大切ですが、長期的なプランがもっと大切です。うまくいかない日があっても長期的に考えれば今日は何を達成すればいいのか、どう未来につなげていけばいいのかということ選手に考えさせます。

— 日本ゴルフ界ではヘッドコーチという考え方が浸透しているとは言えません。ヘッドコーチの役割をどのようにとらえていますか。

ジョーンズ 選手たちがアスリートとして成長していくための考え方をしっかりと教えていければいいと思っています。また、このようなアイデアを各地区に広め、若い選手がナショナルチームに上がってきた時にスムーズに入っていけるプログラムを構築していきたい。PGAやLPGA、各地区のスタッフにも協力してもらっ

て、このようなメッセージを日本中に広げていければいいと思います。

— 9月にメキシコで世界アマが開催されます。日本チームの目標と、そこに向けて必要なことを教えてください。

ジョーンズ まず開催コースに対しての準備をしっかりとするという事です。世界基準の準備をしていけば結果はついてくると思います。世界アマはノムラカップやクイーンシリキットカップよりも層が厚いのは確かですが、ナショナルチームのメンバーはしっかりと準備ができれば世界のトップクラスに入れる実力はあると思います。優勝となると運やさまざまな条件が重なることが必要ですが、いい準備ができれば最終日にチャンスをつくることは可能だと思います。

— 最後に、日本の若いプレーヤーや指導者に伝えたいことがあればお聞かせください。

ジョーンズ まずプレーヤーに対してはテクニックでもフィジカルでもメンタルでも私生活でも何でもいいので日々、少しでも向上することを目指してほしい。日本の外を見て、いろんな可能性があって、いろんなことを伸ばせるのだということに気づいてほしいと思います。指導者にはテクニカルな部分だけではゴルフは絶対に成功しないということをお伝えたいです。スイングは重要ですが、最も大切なのは人間としてバランスのとれた選手に育てていくことです。そうすることが国際的なプレーヤーの育成へとつながっていくはずですよ。

— ありがとうございました。

理想形はスロープシステムが ダブルペリアに取って代わること

2014年1月に新たなJGAハンディキャップシステム(USGAハンディキャップシステム準拠、通称スロープシステム)がスタートして約2年半、宮城県の表蔵王国際ゴルフクラブでは底辺拡大のための最適のツールとしてとらえ、一層の普及を目指している。その内容を後藤久幸ハンディキャップ副委員長、大友富雄競技委員長、斎藤清支配人に聞いた。



スロープシステムの普及活動や導入効果について語る後藤久幸ハンディキャップ副委員長(左)、大友富雄競技委員長(中)、斎藤清支配人(右)。

— 東北地方はハンディキャップ(以下HDCP)インデックスの普及率が全国でもトップクラスです。その中のひとつである表蔵王国際ゴルフクラブではどのような普及活動を行っていったのでしょうか。

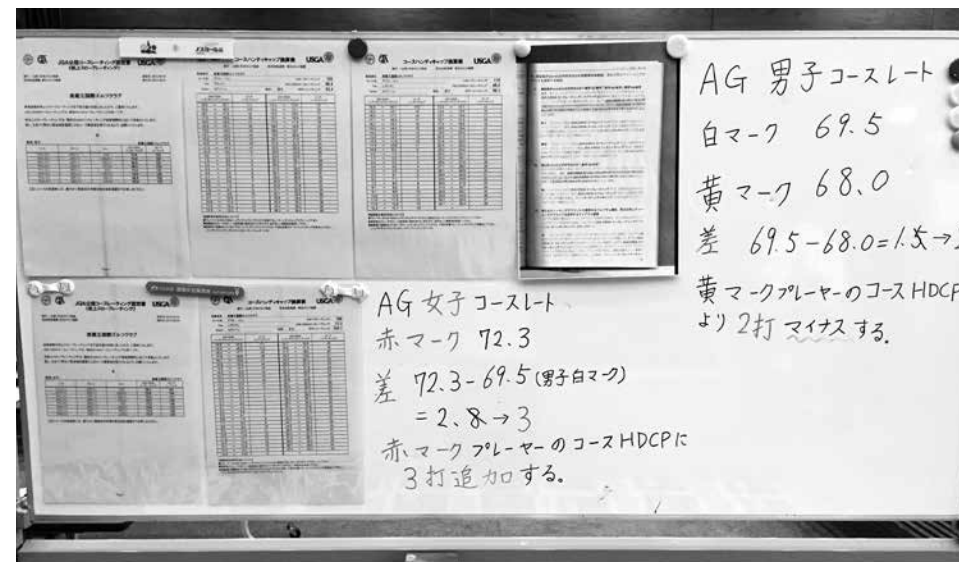
大友 普及率の高さについては東北では冬の間はオフシーズンになるゴルフ場が多いことが影響しているかもしれません。スロープシステムのスタートが1月1日でちょうどオフシーズンでしたから切り替えにはいいタイミングだったと思います。それに東北人は辛抱強いですから、やるとなったら粘り強くやる。シーズンインとなる4月までに何とか普及させようと、どんなシステムなのか、どのような利点があるのか、活用すればこんなに公平に楽しくゴルフができるのだということを説明していきました。

斎藤 前年(2013年)の11月にクラブの各分科委員会の委員が集まる会合で競技委員長の

大友さんにスロープシステムの説明をしていただきましたね。まずは各委員にどういうシステムなのかを知ってもらおうと。そしてメンバーのみなさんにスロープシステムについての案内状と新旧システムの違いを説明した資料をお送りしました。案内状には新HDCPシステムへの登録に異議のある方は申し出てくださいと記していましたが、ほとんど異議は出ませんでした。

後藤 HDCP委員会で最初に説明した時にはまだスロープシステムについての理解度はそう高くありませんでしたが、とにかく導入することを前提にみんなで盛り上げていこうという雰囲気でもとまっていた。

大友 すべてを理解していただいてからスタートというのは不可能ですので、とにかくやってみよう。表蔵王ではシーズン最初の月例会である4月の月例会から導入しました。



HDCP変更の概要を示したホワイトボード。月例会参加者に対して解説を行う際、より深い理解が得られるよう設置された。

斎藤 参加者のみなさんに少しでも理解を深めていただけるように受付にスロープシステムでHDCPがどうなるのかを解説したホワイトボードを設置して、1人1人に説明していきました。「女性はこうなります、ゴールドティーからプレーされる方はこうなります」というように。中には「面倒だから今までのHDCPでいいじゃないか」とおっしゃる方もいましたが、とにかく根気強くお話しさせていただきました。

大友 最初は理解できなかった方も2度、3度と実際にやっていくうちにスロープシステムの良さを実感してきたようです。やはり体験してもらうことが大事ですね。数カ月で軌道に乗ったと感じました。

— クラブ競技への参加状況に変化はありましたか。

斎藤 はい。月例会では1割から2割程度参加者が増えています。以前はクラブ側で使用ティーを決めていたのですが、スロープシステム採用後は参加者自身が選択できるようにしました。それが大きかったと思います。

後藤 年をとって飛ばなくなるとレギュラーティーからでも届かなくなる方が少なくありません。それでも以前の月例会ではレギュラーティーと決められていれば、そこから回らなければならなかった。すると上位に入れる可能性が低くなりますし、プレーしていても面白くなっていくわけですね。それがスロープシステムならばゴールドティーからでもきちんとHDCPが出ますから楽しめるうえに、上位も狙える。「最初は不公平かと思っていたけど、やってみると非常に公平だと分かった」という意見もいただいています。

大友 最初は「同じティーからやらないと公平ではないのでは」という考えの方もいましたが、今ではみなさん理解してそれぞれのティーで楽しんでいますね。

斎藤 スロープシステムの効果として感じるのは月例会の上位の顔ぶれに変化があったことです。女性の優勝者も出るようになってきました。

— ほかのクラブ競技ではいかがでしょう。

大友 表蔵王では毎年12月にその年のクラブ競技の優勝者や上位入賞者が参加できる年間チャンピオンズカップという競技を開催しています。以前はバックティーからプレーする決まりでしたが、今では全カテゴリーのティーを選んでもらえるようにしています。その結果、以前はエントリーしなかった女性やシニアのプレーヤーも参加するという効果が出ています。

— つまり、より多くのメンバーに年間チャンピオンの可能性が出てきたということですね。

斎藤 はい、その通りです。

大友 うちのクラブ競技の話ではありませんが、表蔵王をホームコースにしている方がもうひとつメンバーになっている他クラブの月例会にこちらのHDCPで参加して優勝したことがあり、「HDCPが甘いんじゃないか」と苦情が来ていたそうです。

斎藤 表蔵王はコースレートが高いのでどうしてもHDCPが多くなります。そのHDCPでコースレートの低いところでプレーすると必然的にいいスコア(ネット)になってしまい、優勝する。それを疑問に感じた他クラブからこちらに問い合わせや苦情が来たことが以前は何度かありました。



後藤 我々HDCP委員会としてはきちんと評価してHDCPを出しているのだから文句言わないでくれという見解でした。でも、スロープシステムになってからはそのようなことがなくなりましたね。

大友 どのクラブのどのティーでやっても同じHDCPだったということがそもそも公平じゃなかったわけですからね、今考えれば。互換性があるということがHDCPインデックスのいいところ。本当に公平になったと思います。それに各ゴルファーがコースの難易度に対する理解を深めたのではないかと感じます。以前はコースレートやスロープレートのことを考えたことのなかったゴルファーがほとんどだったと思いますが、今では自分のHDCPにそのまま表れますから「ここはこのくらいの難易度なのだ」と感じてプレーするようになったのではないのでしょうか。

— スロープシステムが採用されてから約2年半がたちましたが、課題や改善点など感じることはありませんか。

後藤 月例会などのクラブ競技だけでなく、一般のプライベートコンペでもっともっと使ってもらえるようになればよりスロープシステムの良さが出ると思います。

大友 プライベートコンペでは依然としてダブルペリアが主流です。後藤さんがおっしゃるようにスロープシステムがダブルペリアに置き換わるのが理想だと思っています。

斎藤 宮城県ゴルフ連盟がやっているチャレンジカップはスロープシステムを採用していますね。



— チャレンジカップとは、どのような競技でしょうか。

大友 競技というよりオープンコンペのような感覚です。年に10回程度開催しており、参加者が組み合わせをリクエストできますからプライベートコンペ代わりにという方もいます。出場資格はHDCPインデックス取得者というしぼりはありますが、回を重ねるごとに参加希望者が増えて大盛況ですね。参加されているみなさんはスロープシステムをよく理解していただいていると感じます。チャレンジカップがこれだけ人気なのですから、各ゴルフ場でもっと同様のコンペを広めていっていいのではないかと思います。それがよりスロープシステムのより一層の普及にもつながるはずです。

後藤 スロープシステムはどのティーから回っても実力を公平に評価してくれるものですからね。

大友 ダブルペリアだと運に左右される部分が少なからずありますが、スロープシステムはそういうところがありません。



JGAハンディキャップ規定リファレンスガイドがクラブハウス内に置かれている。

【ハンディキャップの歴史】(概略)

年代	欧米	日本
17世紀後半	HDCPの概念広まり始める	
1900年頃	英国女子連盟が初のCR開発	
1911年	USGAが初めてCR導入(全米アマ優勝者のスコア)	
1920年代~	全米各地区でHDCPシステムの改善策考案	1950年代 JGA HDCP制度導入 (USGA制度を参考に開発)
1960~70年代	USGAが障害難易度査定法を考案 現行HDCP制度の基礎完成	1978年 旧JGA制度施行 (USGA制度を参考に開発)
1979年	USGAがスロープシステム開発着手	
1987年	USGAがスロープシステム正式施行	
2010年~	現在世界60の国と地域で採用	2010年 スロープ導入決定 (USGAとJGAが正式契約締結)
2014年~		スロープシステム施行 (USGAハンディキャップシステム準拠)

CR=コースレーティング

後藤 HDCPに関してはスロープシステムを信じてやっつけば間違いないと思っています。

大友 スロープシステムはメンバーライフの楽しさを増してくれるものだと思います。最初は競技に出るようなゴルファーが主でしたが、徐々にみんな当たり前のよう利用するようになってきました。みなさん今日プレーするティーのHDCPはいくつなのかということを理解して回っているようです。

— 理解すれば面白さが分かる。

大友 そう思います。

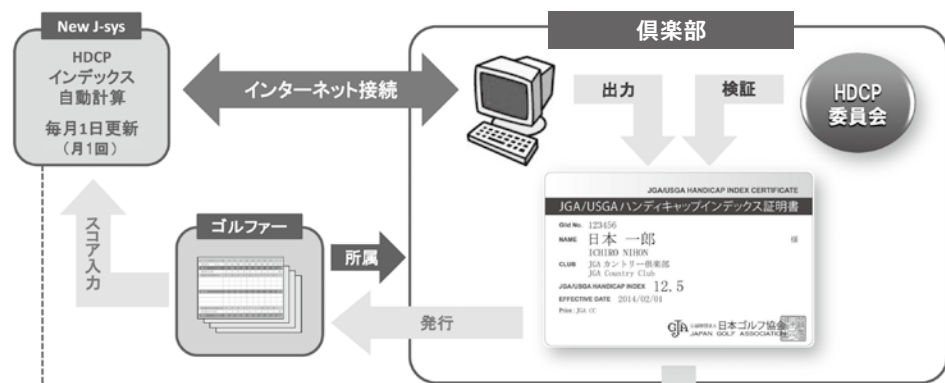
— 理解するところまでどう導いてあげられるかがより一層の普及へのポイントですね。

大友 ゴルフは生涯スポーツであり、おじいちゃんおばあちゃんと孫と一緒に回れる素晴らしいスポーツです。スロープシステムはこのように全く違う世代、違うティーからプレーする者同士がより楽しくできるシステムなのです。それに、初心者にもゴルフの楽しさを覚えてもらうためにも非常に有効なものだと思います。最初から無理に後ろのティーから打たさればうまくいくわけではないですからゴルフはつまらないものだと思うかもしれません。まずは短い距離でプレーして、うまくいくことの楽しさを知ってもらいたい。そういうところでもスロープシステムは活用できるはずです。

後藤 私もそう思います。スロープシステムは底辺を広げ、ゴルフの本当の楽しさを教えてくれるもの。そういったことを伝えていきたいと思っています。

— 本日はありがとうございました。

【世界基準のHDCPインデックス証明書発行の流れ】



世界基準のHDCPインデックス証明書

- ★ これ1枚あれば世界中で認められるゴルファー必携のIDカード
- ★ HDCPインデックスは米国をはじめ世界約60の国と地域で通用(全米アマなどのエントリーにも公式に認められる)
- ★ ローマ字併記なので従来の国際HDCP証明書発行は不要
- ★ 毎月1日(月1回)更新され、常に最新のHDCPインデックスを表示

※JGA加盟倶楽部に所属するゴルファーはJ-sys登録料・利用料が無料